

パピヨンルージュと嵐の星

海賊と女王の航宙記

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 鈴木理華

1

暗黒の宇宙空間に幾筋も鮮やかな長い光跡が伸び、目標の小惑星を木っ端微塵に破壊した。

振動さえ伝わってくるかのような大迫力の映像に、見物の人々から大歓声が上がります。

「すっげえええ！」

「壮観だな！」

「来てよかった〜！」

セントラル星系は言わずと知れた共和宇宙連邦のお膝元だ。人も物も集中する、共和宇宙でもっとも交通量の多い宙域の一つだが、中央座標は連邦軍の本拠地でもあることから、交通量の多さに比例して星系内には厳しい航行制限が設けられ、一般船舶が自由に動ける範囲は極めて限られている。

船乗りにとっては忌々しい限りの宇宙なのだ。

だが、そんな航行禁止宙域に一般人の立ち入りが堂々と許される、数少ない機会がある。

連邦宇宙軍が定期的に行う公開演習がそれだ。

一堂に見ることは滅多にない駆逐艦、軽巡航艦、

重巡航艦、空母、戦艦が集結して性能を披露する。

軍艦や戦闘機が好きな人にとっては見逃せない、毎回希望者が殺到する大人気のイベントなのだ。

見学希望者は指定の宇宙港から連邦軍の輸送艦に乗せられて（これも軍艦好きな人にはたまらない、大興奮の経験である）演習の現場宙域まで送られ、帰日も最寄りの宙港まで送り届けてもらえる。

至れり尽くせりだが、軍艦の数に対して希望者があまりにも多いので抽選制となっている。

運良く当選した人だけが演習を見学できるのだ。

しかし、決して『お客さま』状態ではない。大型輸送艦に何十人も詰め込まれたすし詰め状態が何時間も続くのだ。従ってその劣悪な環境に耐えられる、

体力に自信のある健康な成人でない、参加自体が認められない。

年齢制限はないが、お子さまや持病のある方、ご高齢の方はご遠慮くださいという催しなのだ。

連邦軍にとつても、この演習は自分たちの活動を市民に広く知ってもらう大事な広報活動である。

そして単なるサーブスでもなかった。

たとえば共和宇宙のどこかで非常事態が発生して、大勢の一般人を緊急避難させる必要に迫られた場合、どんな手順がもつとも効率的か、それだけの人間を運ぶ際、どんな問題が起きるのか――。

市民の協力を仰いで模擬行為を行っているという一面もあるのだ。数万という人数を集めることなど、そう簡単にはできないから、絶好の機会である。

そのため、少々申し訳ないが、市民の皆さんの『乗り心地』は後回しだった。

もつとも見学者はすし詰め状態などものともせず、眼を輝かせ、わくわくした顔で、艦内の表示装置に

映し出される演習の様子を見つめていた。

「やっぱり現場で見るとすごいな！」

「ああ！ 五十センチ砲の一斉掃射なんて、こんな時でもない、まず見られないもんな！」

見たら普通は死んでいる。

一斉掃射のたびに頑丈な艦に振動が走る。

これがまた、軍艦好きには痺れるのだ。

一方、宇宙空間からも次々に声が上がっていた。

「探知機が真っ白だ！」

「来た甲斐があつたぜ！」

想像以上の威力と衝撃に感激し、同時に慌てて

自船の感応頭脳に言い聞かせる。

「警報は鳴らすな！」

「非常行動も取るなよ！」

「迂闊に動いたらそれこそ拘束されるからな！」

見学者は何も輸送艦の中にいるだけではない。

自分の宇宙船を持っている人も厳正な抽選の結果、数は限られるが、通行を許可され、すぐ傍の宙域で

一部始終を見物していた。

軍はあらかじめこうした船乗りたちに『感応頭脳なだめ手順』なるものを配布し、事態に対処する方法を教えていたわけだが、間近にした実弾演習の迫力と衝撃は予想以上だったのだ。

規制の多いセントラル星系だから、許可なしでは通れない航行禁止宙域が至るところにある。

そこに連邦軍のお墨付きで入れるとあって、特に軍事に熱心でなくても見学を希望する船乗りは後を絶たないのだが、こちらもそう簡単ではない。

まず連邦軍が指定するセントラル星系内の宙域に跳躍した後、厳しい船内検査を受けて、軍の監視と指示に従って、公開演習宙域まで十時間近く掛けて通常航行で行かなくてはならない。

現地に到着した後も、少しでも勝手に動くことは許されない。見張りの駆逐艦にすかさず注意されて、従わなければ退去させられてしまう。

かなりの不自由を強いられる上に、往復で二日は

潰れることになる。

恐ろしく大がかりな見物なのだ。

それでも輸送艦にすし詰め、にされるより、自分の船の中から自由に見物したいと考える人はいる。

公開演習宙域の近くに意外なほど多くの宇宙船が集まっていた。

《パラス・アテナ》もその一隻である。

ただし、この船は抽選に当選したわけではない。

そもそも見学の申し込みをしていない。

こっそり潜り込んだのだ。

当然、軍の検査も受けていない。

こんな不届き者が現れたり近づいたりしないよう、連邦軍は眼を光らせているが、ケリーとダイアナは軍の探知能力も盲点も把握している。

他の船に紛れるかたちで、堂々と見物していた。

「こりゃあ、見応えがあるな」

ケリーは笑って、隣のジャスミンに話しかけた。

「この公開演習に参加したことは？」

「ない」

「そりゃまた、宝の持ち腐れだな」

現役の軍人時代、ジャスミンの経歴キャリアの大半は艦の戦闘要員だった。機甲兵だったり戦闘機だったりの違いはあるが、いずれにせよ凄腕オウデである。

軍の広報から、次の演習の説明が入った。

「戦闘機部隊による仮想敵母艦への攻撃を行います。最初に出撃する部隊の編成は連邦軍の主力戦闘機であるM16通称スターブローです。M16は空対空戦に優れた機体ですので、仮想敵戦闘機の一掃を目的としています。続いてミサイルを二基搭載した攻撃機S2通称センチッドの部隊が出撃し、仮想敵母艦を撃沈させます」

空母から戦闘機が続々と発進して行く。

M16が六機、S2が六機の編隊だ。

その勇姿に、また見物人から歓声が上がります。

M16が先制攻撃を仕掛けて敵戦闘機編隊を撃退し、制空権を確保、邪魔者を蹴散けちらしたところでS2が

ミサイル攻撃を行うという手順である。

近代戦では定番の戦法だが、ジャスミンは小さく舌打ちしたうちした。

「この作戦内容なら一機種で充分だろう。一機種でM16にだって対艦ミサイルは搭載できるんだから」

ケリーが苦笑しながら指摘した。

「できるのと実戦で通用するのは話が別だぜ」

ミサイルを撃つ前に敵機に撃墜げきつひされてしまったら元も子もないわけだが、ジャスミンは納得しない。

「S2だけでは無理だ。あの旋回性能で空対空戦ドッグファイトをこなすのは厳しい。しかし、M16なら、ミサイルを二基搭載して敵戦闘機を躲かわして、目標を爆撃できるはずだぞ。あれはもともと戦闘と爆撃両方をこなす戦闘爆撃機マルチロールとして開発された機だ」

ケリーは呆あきれて言い返したのである。

「それは、あんたみたいに常識を度外視したいかれ野郎に限って言うことで、普通は対艦ミサイルを二発もぶら下げてたら重たくて重たくて、ろくに身

動きできやしねえよ」

ダイアナが話に加わった。

「少なくとも運動性能は格段に落ちるわね」

M16はジャスマミンの愛機だったM7シェイクスの後継機に当たる。ダイアナはそれを知っていたので、ジャスマミンに質問した。

「あなたが乗っていたM7も、一応、戦闘爆撃機ということになっていたけれど、どちらかと言えばドッグファイト空対空戦に優れた機体だったでしょう。あなたはM7で爆撃したことがあるの？」

「もちろんあるとも。——演習でだがな」

「その演習の設定は？」

「この演習とまったく同じだ。違うのはシェイクス一機種で編成された部隊だったこと、仮想敵機は当時のマース軍正式採用機種だったこと、目標までの距離がもっと長くて障害物があったことくらいだな。後は変わらない。六機を躲して目標空母を破壊——それだけだ」

ケリーはとつても疑わしげな顔で尋ねた。

「まさか一人で出撃したとか言わねえよな？」

その作戦内容で単独行動のわけがないとケリーは思ったのだ。

誰だって思うに違いない。

その条件では成功率ゼロパーセントだと。

ジャスマミンは呆れ顔で言い返してきた。

「当たり前だろう。こちらも六機編成で出撃した」

ちよっぴり安心したのも束の間、非常識な人妻はさらりとやってのけたのである。

「ただ、他の五機は作戦開始早々敵機に銃撃されて、わたし一人になったがな」

「……その時点で敵は何機残ってたんだ？」

「六機全部だ。探知性能の差が如実に^{にょじつ}出た」

眼を丸くして吹き出したケリーだった。

「それじゃあ、実質的にあんたの単独行動だろうが。その時点で『作戦は失敗、帰投する』っていうのが

戦闘機部隊の理論^{セオリー}のはずだぜ」

擲^や擲^ゆするのように言ったケリーだが、ジャスミンはその挑発には乗らずに首を振った。

「——それでは軍人失格だ。実戦では、仲間が全機撃墜されて、残っているのは自分一人という状況も充分起こりうる。その度に基地に逃げ帰っていたら、戦闘機部隊の存在意義がない」

真理である。

画面の中ではM16部隊がそろそろ仮想敵機編隊と遭遇^{まうぐ}しようとしていた。

この部隊は六個の緑色の点で表示されている。

それに迫る六個の赤い点が仮想敵機編隊の編隊だ。ちなみにこの仮想敵機も同じM16を使っている。

つまりは操縦者の技倆^{きりょう}で勝敗が決まるわけだが、敵があまり脆弱^{ぜいじやく}だとあっさり終わってしまうので、連邦軍は事前にこの点について説明していた。

「仮想敵機の操縦者には連邦軍の中でも特に精鋭を配しています」

とはいえ、これだけの見物人に、連邦軍の部隊が

敗退するのを見せつけるのは好ましくない。

操縦者は大いに発破^{はっぱ}をかけられているはずだった。見物人が見守る中、連邦軍機を示す六個の緑の点と仮想敵機を示す六個の赤い点が急接近し、きれいな三角形だったそれぞれの形がばつと散った。

素人^{しょうと}には何をやっているのか全然理解できない、めまぐるしい動きに変わる。

ジャスミンは興味津々^{しんしん}の顔でその動きを見つめて、冷静な感想を述べた。

「旋回性能はシェイクスと大差ないようだな」

「あんたが乗れば、もつと振り回せるだろうがな」

ケリーは言って、話を戻した。

「——六機編隊だったのに、あんたの機だけ銃撃を免^{まぬ}れたのは何でだ？」

肩をすくめたジャスミンだった。

「どうしてだろうな。あれは理屈^{りくつ}では説明できない。警報^{アラーム}が鳴る前に回避行動を取っていたんだ」

ケリーはおもしろそうに妻を見つめて言った。

「で、六対一で？ あんたが勝ったのか？」

「ああ。探知性能は仮想敵機のほうが優秀だったが、射撃技術はわたしのほうが上だった」

要するに、六機の仮想敵機に模擬弾を命中させて一機残らず撃墜し、邪魔者がいなくなつたところで悠々とミサイルを放つたということだ。

ダイアナがお手上げの仕草をしている。

「——あなた、照準器も必要ないんじゃない？」

「そんなことはない。あれはあれでちゃんと要る。」

問題は目標を完全に捕捉ロックオンしないと射撃許可を出そうとしない射撃システムのほうだ」

ジャスマンはちよっぴり物騒な笑みを浮かべた。

「探知機に目標が映つたのに——わたしには目標が見えてゐるのに、完全に捕捉ロックオンしたとシステムが判断するまで銃撃できないなんて時間の無駄だ。わたしはそう主張して、当時の整備士と賭けをしたんだ。」

『四の五の言わずに射撃条件を緩和かんわしろ』と言うと、整備士は『無駄玉を撃つだけだ』と猛然もっげんと抵抗した。

『実戦でそんな仕様が通用するもんか』と言うから『実戦では試せないことを試すのが演習だろう』と言ひ返した。加えて、わたしがその仕様で、敵機をちゃんと撃墜できたら、浴びるほど呑ませてやると約束した」

「じゃあ、あんたが敵機を撃ち洩もらしたら？」

「二度と整備に文句は言わないと約束した」

どっちに転んでも整備士に損はない賭である。

笑いを噛かみ殺しながらケリーは訊きいた。

「——で、呑ませてやつたんだな？」

「ああ、ぐでんぐでんになるまで酔わせてやつたぞ。ただ、なぜか、向こうもわたしに奢おごると言い張つたもんだから、最後は結局ただの呑み会になった」

整備士としては常軌を逸いっしたジャスマンの技倆ぎりやうに仰天ぎやうてんし、敬意を払わずにいられたのだから。

その心境が容易に想像できて、ケリーは微笑し、悪戯いたずらっぽくも疑わしそうな表情で続けた。

「だがなあ、その演習、成功したと言えるのか？」

「どういう意味だ？」

「あんたと同じことのできる操縦者が他にいるなら別だが、常識的に考えて、そんな奴はいないだろう。『ごく一部の精鋭』どころの騒ぎじゃねえ、たった一人の操縦者にしか実行不能な作戦。そんな無謀を提案できる指揮官はそうはいないはずだぜ」

事実上、机上の空論になってしまうと、ケリーは言いたいらしいが、ジャスミンは不敵に笑った。

「実行可能な操縦者はここにちゃんといるのか？ 使わなければそれこそ宝の持ち腐れだぞ」

画面の中でめまぐるしく動き回っていた赤い点が二つ消えた。

残った四つの赤い点を六個の緑の点が追い回す。

その間にS2の編隊が攻撃目標に接近して、見事、ミサイルを命中させていた。

その様子は単なる記号の消失ではなく、ちゃんと表示装置に映像が映り、輸送艦の見物人も近隣宙域に集まった船乗りたちも大歓声を上げたのである。

《パラス・アテナ》では大型夫婦が、冷静に感想を述べている。

「ミサイルの大盤振る舞いだな」

「ああいうものには使用期限があるからな」

古くなったものを使い切る目的もあるのだ。

軍の作戦は見事成功したわけだが、ジャスミンはやはり不満そうだった。

「^{デモンストラション}実演だからか？ 人員が多すぎる。もつと絞った少数精鋭で行けるだろうに……」

「だから、自分を基準にして考えるんじゃねえよ」

ジャスミンが仮想敵機を操縦していたら、一機で連邦軍機を全滅させてしまいかねない。

逆に連邦軍機に乗っていたら、たった一機で仮想敵編隊を全滅させてしまう恐れがある。

そう指摘して、ケリーは言った。

「そんな怪奇現象は一般市民には見せられない」

「海賊。褒めてくれていると解釈した上で言うが、当時の操縦者はそれほど甘くなかったぞ」

「あんた、現に六対一で勝ったんだろうが」

「結果的にそうなったただけだ」

ジャスマンは真顔で反論した。

「軍人の中でも操縦者パイロットという人種は明らかに特殊だ。

戦闘機にせよ機甲兵にせよ、よく言えば専門家スペシャリストで、

悪く言えば我が強い。わたしとは別の意味で、その

誰かにしかできないという芸当を持っている人間が

他に一人もいなかったとは思えない。あの演習では

たまたまわたし一人が運良く残っただけだ」

「運も実力のうちだぜ、女王」

おもむろにケリーは言った。

「もつとも、操縦者パイロットっていう人種が特殊だっていう

意見には俺も賛成だ。あの連中はいわば王さまだ。

——あんたは女王さまだがな」

笑って肯定こうていした上で、ケリーは疑問を呈した。

「ただなあ、軍つてのは規律第一の組織だ。一人の

突き抜けた天才よりは十人の平均的な才能のほうが

重宝する。その方針で兵隊を育てるはずだぜ」

ジャスマンはくすぐったそうに肩をすくめた。

「わたしもその方針で育成されたと思うんだがな。

どういうわけか途中で同僚たちと進路コースがずれたんだ。

同じ教育を受けているのに明らかに差が出始めた」

それが天才というものである。

気の毒だったのは当時のジャスマンの教官だろう。

十年に一人の天才なら、驚きはしても喜べる。

将来有望な戦力になると期待もできるが、百年に

一人の異常すぎる天才ではどう扱ったらいいいのか、

頭を抱えたに違いない。

ジャスマンも自分の技倆けいりょうが桁外けたはずれているらしいと

いうことは自覚じかくしていた。

それによって生じる弊害へいがいもだ。

「シエイクスはいい戦闘機だったが、それでも時々、

ものたらなざを感じた。かといって、もつと自分に

合う機体が欲しいと願ったところで、そんなものは

どこにもなかったんだ」

つくったところで使えるのがジャスマン一人では、

採算が合うはずもない。

ダイアナが言った。

「軍隊という組織にとつて永遠の課題ね。個々の兵士の熟練度を追及するのか、誰でも使える兵器の利便性を優先するのか」

ジャスミンは首を振った。

「その言い方は語弊があるな。わたしの知る限り、素人が簡単に使えるような武器や兵器は軍にはない。歩兵の持つ自動小銃一つとっても素人には無理だ。戦闘機や機甲兵となると、専門的な訓練をみっちり受けて初めて扱えるようになるものだぞ」

「了解。では、少なくとも戦闘機や機甲兵に乗れる訓練を修了したという前提で話をするわ。あなたが感じたものたらなさとは具体的にどういうこと？」

「自由に動ける範囲が狭すぎる」

「……………」

「機体の性能というより、一にも二にも感応頭脳の問題だった。危険はないと判断して行こうとしても

感応頭脳が『危険』と判断したら、もうアウトだ。

動いてくれない」

諦めたように肩をすくめて、ジャスミンは笑いを含んだ眼で夫を見た。

「あの当時のわたしにおまえのようなたら、能力があつたらと、つくづく思うぞ」

「人聞きの悪いことを言うなよ」

「事実だからな。小惑星帯を高速で飛行しながらの射撃を容認させるのも一苦労だったんだ。それこそ目標を正確に捕捉ロックオンできないという理由で射撃許可を出そうとしない。目標を前にしながらぶさけるなど、何度か感応頭脳を罵倒ばとうした覚えがある」

ダイアナが（彼女のせいではないのだが）申し訳なさそうに口を挟んだ。

「それじゃあ、M16はもつとあなたに吐しゃられるわね。あの機体はその仕様を徹底的に進化させているもの。射撃許可を出さないのでなく、『射撃を行う際は安全速度まで減速して行つてください』と操縦者に

指示するそうよ」

ジャスマンが絶句した。

みるみる怒髪天をつく形相になった。

赤い髪を逆立てた怪物が火を噴いて吼える寸前に、ケリーは慌てて彼女の注意を逸らしたのである。

「見ろよ。特殊艦が来るぜ」

今回の公開演習では特別に第三軍の特殊艦による

《門》跳躍が披露されるのだ。

ケリーとジャスマンはこれを見に来たのである。

四十年前、彼らがいる宙域にはセントラル星系の

《第三駅》があった。

複数の乗り場を持つている大きな駅だった。

その対岸の一つがアドミラルにあった《第五惑星

前駅》である。

そこから特殊艦が跳躍してくるのだ。

連邦軍は事前にアドミラル政府に連絡を入れて、

《門》を跳躍させてもらいたいという要請を行い、

正式な許可を取っている。

アドミラル政府はその要請をクエア財閥に伝えて、自動的にこの話がジャスマンの耳に入ったのだ。

ケリーとジャスマンはリビングでくつろぎながら、ぎつしりと並ぶ宇宙船の列を眺めていた。

二人とも、かつてこの宙域に、もつとも賑わった《駅》があったことを覚えている。

あの頃はこんな光景が日常茶飯事だった。

いつ見ても跳躍待ちの宇宙船が列をつくっていた。

直径五キロメートルにも及ぶ巨大な《駅》は

宇宙の灯台の役目も果たしていたから、常に煌々と

照明を灯し、華やかに輝いていたのである。

今は何もない。

廃駅となった後、巨大な建造物も解体・撤去して、

がらんとした空間が広がっているだけだ。

軍の広報から放送が入った。

「重力波エンジンは、作動準備に入ります」

表示画面に特殊艦の艦橋が映し出された。

ごく一部、重力波エンジンの操作盤だけが映って

いる状態だが、それにしても現役の艦の艦橋を一般市民に公開するのは極めて異例だ。

この演習は《門》の数値次第では中止になる可能性もあったが、幸い跳躍可能な状態だったようだ。

航宙士の声が入る。

「《門》確認。安定度数九十三」

「了解、重力波エンジン、作動。同調開始」

現代の船乗りにとっても軍艦の《門》跳躍など、見物できる機会はなかなかない。

そもそも重力波エンジン自体、馴染みがない。

輸送艦の面々も、周辺に集まった船乗りたちも、食い入るように画面に見入っていた。

画面にはその輸送艦の艦橋——正しくはドライヴ反応探知機も映っている。

シヨウ駆動機関の作動を探知する装置だが、今はまったく反応していない。跳躍してくる船はないと判断しているということだ。

「間もなく特殊艦が門突出します」

広報の説明の後、何もない宇宙空間に突如として、特殊艦の巨大な姿が出現した。

シヨウ駆動機関とは明らかに性質の異なる跳躍に、若い世代の船乗りは驚きの声を発したのである。

「本当に探知機に映らないんだな」

「一つ間違えば、突出先の船と正面衝突だぞ」

「だからって、今時《門》共鳴探知機なんか、船に積めないだろう」

「それを言うなら重力波エンジンもだ。載せたって使い道がない。ただの積荷だぜ」

一方、古い世代の船乗りは感慨深げだった。

「いやはや、時代も変われば変わるもんだ……」

「まさか今になって《駅》のない《門》を跳ぶ船を見るとはなあ……」

「当時だって滅多にやらなかったが、今となつては逆立ちしても無理だな。重力波エンジンなんてもう二十年触ってない」

「いくら数値が高い《門》でも跳躍は遠慮したいよ。」

向こう側が見えないんだから」

跳躍先が見えないのはシヨウ駆動機関も同じだが、跳躍先が航路なら感応頭脳が事前に跳躍先の情報を取得するので、跳躍しても船同士が衝突するという事態はまず起こらない。

安全な航路から外れている上、《駅》のない《門》など、危なくて跳躍できない。

それが今の船乗りの一般的な見解だった。

「しかし、軍も何だって今頃、《門》跳躍なんかを演習に入れてきたんだろな？」

「だよなあ。特殊艦の重力波エンジンは特定航路で使うものだろう？」

特定航路とは五千光年以上の長距離を結んでいて、比較的数字が安定している《門》のことだ。

《パラス・アテナ》のリビングでケリーもまったく同じ疑問を呟いていた。

「まさか今さらここに《駅》を設置しようって言うんじゃないだろうな？」

ジャスミンも懐疑的な顔である。

「このご時世にか？ 少なくとも商業用の《駅》を建設するのは無理だ。採算が取れないぞ」

「それじゃあ、軍専用の《駅》かな？」

この意見を裏付けるように、広報の放送が入り、演習終了を告げた後、こんなことを言ってきた。

「ご来場の船乗りの皆さまにお願ひします。現在、連邦軍はかつての《駅》の位置を記した宙図を配布しております。もし、この宙点以外の《門》を跳躍する船を見かけたら速やかにご連絡ください」

「……無茶を言うもんだ」

ケリーは眼を丸くした。

「今の船は《門》共鳴探知機を持ってないんだぞ。

その船が《門》を跳んできたかどうか、どうやって見分けろってんだ？」

この疑問が通じたのか、広報は続けて言った。

「《門》を跳んだか否かを皆さんが判断する必要はありません。ただ、明らかにシヨウ駆動機関以外の

手段で跳躍したと思われる船に注意してください」

ドライヴ反応なしに出現したり消えたりする船を見かけたら教えてくれという意味である。

なるほど、それなら今の船乗りの領分と言えるが、それにしても奇妙な頼みごとである。

「《門》^{ゲイト}を使った密輸でも警戒^{けいがい}してるのかな？」

「まさか、今時？」

見物に集まっていた船が移動を開始した。

しかし、数十隻の船が一度に動くのは危険だから『退場規制』が設けられている。

離脱する順番は事前に軍から通達されているので、その指示通りに動かなくてはならない。

ケリーは相棒に声を掛けた。

「そろそろ引き上げるか」

「了解」

ぐずぐずしていたら、当選していないのに見物に紛れていたことがばれてしまう。

ダイアナはあらかじめ周辺の船の探知機に干渉し、

自分の動きを気づかれないようにしてあった。

肉眼で見えていたら《パラス・アテナ》一隻だけがその場を離れていくのが丸見えだったろうが、列を成しているといつても宇宙船の行列だ。

接触事故を避けるために船と船との間隔はかなり空^あいている。

どこにどの船がいるかは探知機頼みだ。

その探知機さえ封じてしまえば、こっちのもので、ダイアナは、そーっとその場を離れたのである。

《パラス・アテナ》のリビングでくつろぎながら、ケリーは不思議そうに言った。

「軍の連中、本気で《駅》^{ステーション}をつくる気かね？」

「だとしたら間違いなくクーアに声がかかるはずだ。《駅》^{ステーション}の建設はうちが一手に担^にっていたからな」

答えて、ジャスマンは悪戯^{へた}っぽい眼で夫を見た。

「おまえは下手^{へた}をすると真^まっ先に通報^{つうほう}されそうだな。何しろ、推定^{すうてい}百以上の《門》^{ゲイト}を知っている男だ」

ダイアナが訂正した。

「厳密に言うとお百十二個、暫定十七個よ」

「その暫定数は何だ？」

「確認はしたけど、実際には跳んでいない《門》よ。数値が足らなくて跳躍できなかったの」

「ほほう……」

ジャスミンはおもしろそうに言ったものだ。

「おまえでもそんなことがあるんだな」

「こればかりは人の都合じゃどうにもならねえよ。自然現象だからな」

そんな話をしてしていると、ダイアナが不意に言った。

「——ずいぶん遠いところから通信が入っているわ。」

ジャスミン、あなた宛よ」

「繋いでくれ」

画面に映ったのはもじゃもじゃの顎髭を生やした、見るからに頑固親爺といった風貌の男性だった。

顎髭と対照的に頭髮は薄く、偏屈そうな印象だが、ジャスミンを見て、くしゃりと嬉しそうに笑った。

「いよう、元氣そうじゃねえか」

ジャスミンも破顔した。

「ガストーネ！ 久しぶりだな」

惑星ブラケリマで整備士をしているジュゼッペ・ガストーネである。

以前ジャスミンがパピヨンルージュという名前で峡谷競走に参加した時、世話になった人物だった。

2

「どうした？ 峡谷きやうこくで何かあったのか？」

前置き抜きにジャスマンは尋ね、相手は髭ひげもじやの顔で苦笑した。

「おめえ、相変わらず情緒けいじゆの欠片かけらもねえな」

「夫の台詞せりふだが、わたしにそんなものを求めるのは時間の無駄むだだそうだが。おめえがわたしに連絡して来るからには、自動的に飛翔機フライヤーがらみだと思つたが、違ちがうのか？」

「相変わらず仲のいいこつて。——違ちがわねえよ」

ガストーネは豪快ごうかいに笑つて、真顔まへんになつた。

「ちつと込み入つた話になるんだが、今いいか？」

ジャスマンはわざと警戒けいけいする表情をつくつてみせ、悪戯いたづらっぽく笑つて言つたものだ。

「おめえの頼みならたいていのことは聞いてやるが、峡谷競走キヤニオンレースに復帰しろという話ならなしだぞ」

「パピヨン復帰とあつちやあ、ブツカラがひつくり

返る騒さわぎにならあな。そいづもおもしろそうだがよ。

——試験飛行テストパイロットを引き受けてほしいのよ」

「新型機しんがたきのか？」

「まあ、そうだ」

低空競走ローコンレースはブラケリマ政府主催ギャンブルの公宮賭博ギャンブルだ。

飛翔機フライヤーと呼ばれる大気圏内限定機たいきけんないげんていきを使った競走で、その操縦者フライヤーも飛翔士フライヤーと称しょうされている。

航空機産業の盛んなブラケリマ全土で開催され、国民に熱狂的に愛されている娯楽だ。

当然、多額の金かねが動く。

ブラケリマ政府の重要な収入源でもある。

その中でもフィンレイ峡谷で行われる峡谷競走キヤニオンレースは低空競走の頂点ていてんに位置けいしており、動く金も桁違けたちがいだ。

ガストーネはその峡谷で何十年も飛翔機フライヤーの整備を行つてきた。いわば整備界の大御所おんごしよである。

「ブツカラでは最近、障害物競走レースが流行はやっててな」
 故郷を愛するガストーネは惑星ブラケリマという
 正式名称は使わず、ブツカラと呼んでいる。

つまり惑星全体を差す言葉だ。

「あの峡谷にどうやって障害物なんか置くんだ？」

ジャスミンが驚いたのも無理もない。

フィンレイ峡谷は地形そのものが障害物のような
 ものだからだ。あらためて障害物を置く理由がない。

「最初は他の地域で始まったんだ。映像を送るから
 ちよつと見てくれ」

そこでジャスミンは自動機械に珈琲コーヒーを運ばせて、
 ケリーと二人で、送信された映像を開いてみた。

映し出されたのはフィンレイ峡谷ではない。

青い空と雲を映す大きな湖が広がっている。

画面に突然、飛行中の航空機が割って入ってきた。
 全部で九機、全長十五メートルほどの飛翔機だ。

低空競走レースには機体の性能に応じて軽量級、中量級、
 重量級、怪物級モンスタークラスがある。

その中でも一番小型の軽量級の競走レースだろう。

画面は競走中の九機を後ろから撮影しているが、
 ジャスミンはすぐに違和感に気づいた。

「……遅いな？」

水上や砂漠地帯で行われる競走レースは基本的に直線を
 飛ぶことが多い。

一方、峡谷競走は曲がりくねった深い谷を飛ぶ。

それが醍醐味だごみになっているのだが、直線の競走レースは
 速度スピードが命であるだけに、機体の性能がよくわかって
 見応えがあるという客もいる。

その辺のことは、以前ブラケリマに滞在した折に
 ジャスミンも耳にしていた。

低空競走レースは機体の大きさの他に、飛翔士フライヤーの経験と
 技倆ぎりょうに応じて、B級、A級、S級に別れているが、

最高位のS級選手ともなると時速六百キロを越える
 速さで地表すれすれを飛んでいく。

この九機はその半分も出ていない。
 首を捻ひねっていると、九機の前方の空間いっぱい

突然、巨大な『あみだくじ』が出現したのである。

ジャスミンは危うく珈琲を吹き出すところだった。横で見ていたケリーも眼を見張った。

「なんだ、こりゃあ?」

空一面を埋め尽くすほどの大きさだった。

均等の間隔に並んだ縦棒の間に、不揃いの高さで横棒が走っている。どうみても『あみだくじ』だが、無論、実体ではない。立体映像のように見える。

しかも色はシヨッキングピンクである。

これが障害物らしいが、ジャスミンは啞然として、覚えず唸った。

「こんなものに向かって飛ぶのか……?」

九機の操縦者も同じ心境だったと思うが、何しろ進路前方にあるのだ。逃げるわけにはいかない。

九機は『あみだくじ』に向かって猛然と突き進み、それぞれ機体を捻って縦棒と横棒の間に進入した。

接近してみてわかったが『あみだくじ』の間は飛翔機が一機ぎりぎり通れるか通れないかくらい

大きさだった。

結果、八機は無事に『あみだくじ』を抜けたが、一機が機体を捻り損ねて巨大な横棒部分に接触した。すると、その機体は空中に引っかかって停止してしまつたのである。

推進機関は全力にしているのに何かに拘束されて、身動きできなくなっている。

規模が違いすぎるが、まるで蠅取り紙に掛かった蠅のようだった

これでケリーとジャスミンには『あみだくじ』の正体がわかつたのである。

「電磁網か!?!」

「こんなふざけた形の!?!」

一般的には宇宙船の事故防止装置として使われているものだ。それを肉眼で見えるように色を付けて、『あみだくじ』の形に加工してあるわけだ。

ダイアナが内線画面から言ってきた。

「技術的には、電磁網をこの形状に加工することは

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。